



Blue Rosary

<Cords Answer>

Studio ***46

目次

Side - C -

❖ 錆びた鍵	2
❖ 桜咲く日	5

Side - D -

☒ 罪跡	10
☒ 朔夜	13

Side - A -

† さざなみ	18
† 残闕	21

S i d e - C -

❖ 錆びた鍵

悪い夢なら覚めてほしい。十歳で生まれた隠れ里を追い出され、十四歳で初恋相手と大事な双子を失った彼は、もう何度そう願ったかわからなかった。

彼の一族は、法具という魔道以上の難易度の神秘を扱う。人間だらけの異世界よりも、文明が遅れているらしいこの世界で、高い技術を扱う魔族や妖精よりも稀少な道具を作れる何でも屋だ。

しかし人間界では、魔法や霊網が未発達な代わりに、設備と資材、一定以上の技術者があれば各地で作れる設計の物が多いのだという。人間界のことはよく知るくせに、この世界のことは世間知らずな桜色の髪の娘が、恐る恐る舌足らずの説明を続けた。

「い、一応、誰でも作れる、わけじゃないけど……。ラスティにしか作れない、そういうものは、そんなになんかと思う……」

彼より三歳年上なのに、目も合わせずにおどおどと伝える娘。白い外套で顔も大半隠しながら、慣れた地のはずの暗い森を、びくびくと歩いていた。その姿が痛々しく、何も言えずに簡単に話題が尽きてしまった。

小さな狭い島であるが、深い森に洋館型の城と古代遺跡が並び立つ北の小島に、以前来たのはとても寒い季節だった。今は先導の娘がやっと動き始めた夏前で、それでも北の地にある島は寒々しい。

彼を北の城に連れて行く桜色の髪の娘は、彼の初恋相手の実の姉だった。半年前に大事な妹が突然目前で亡くなり、合わせて両親も失踪もしくは別人のようになってしまった。一人でショックを受け止めきれず、精神的な引きこもり状態になった。死んだ妹のことを知る彼が根気よく話しかけ続け、やっとたどたどしく喋ってくれるようになったのが最近だった。

「でも、北の、四天王は……わたしに、何の用……？」

四天王。法治の未熟なこの世界で、人より強い力を持つ化け物を裁くために、四方に根差す悪魔の家系。

娘は妹が四天王の城で命を落とすまでは、跡取りの候補として強い水の力を鍛えられていた。その契約は白紙に戻ったはずなのだが、現在城を再び訪ねることになったのは彼のためでもあった。

彼の双子も娘の妹と同じ時に、北の城で帰らぬ身となった。その魂を渡してもらおうと引き換えに、娘ともう一度話をさせることを四天王と約束したのだ。

「あっ、ごめん、怖いわけじゃ、ラスティは悪くないの……！　ごめ、ごめんなさい……！」

彼が一瞬難しい顔をしたので、娘が体を竦めて顔も俯いてしまった。何に対してもこの調子なので、違う違う、と努力して柔らかい声を作る。

「頼んだのはオレなの、何も間違っていないし。咲香さくらに悪いようにはしないって、四天王も明言してるし」

本当は悪魔である者を信頼するなど、以前の彼には有り得なかった。それでも北の四天王は、彼の一族、彼を追い出した化け物達を滅し、彼の母と双子だけを保護していた。利用するためではあるが、二人は悪い扱いを受けていない。悪魔の城で人殺しの道具を造る使命を与えられたのは、ある意味当然の待遇だろう。

「ミストをちゃんと、オレに返してくれたんだから。咲香のことも、今まで丁寧に鍛えてくれたんだろ？」

娘からその話を聴いていたので、やっと彼も四天王と取引する覚悟を持てた。一度真剣に話してみれば、乱世の中で苦勞する北方の城主で、部下を探すためにいくら異所への介入はしてきたものの、本質的には人間嫌いだった。有力な跡取り候補の咲香を見つけてからは、人世に関わらずに城で大人しくしていたのだ。

ミスト。彼の双子の名を聴いて、咲香の薄い色の眼に涙が浮かぶ。北の城では二人は仲が良かったという。

歳の差はあるものの、背丈は現在同じくらいなので、彼は横目で咲香と視線を合わせて再び笑った。

「無理難題は言われるだろうけどさ。咲香の目的は、四天王にも多分いいものだから、嫌なことは嫌でいいし要求は遠慮なく言えよ」

咲香もただ、彼のために四天王の要請を引き受けたわけではなかった。たった一つの心残りが、咲香にも北の城にあるときいた。何かあれば彼が庇うつもりで、ここまで一緒についてきたのだ。咲香が望む心残りは、彼の双子がおそらく望むだろうことでもあった。

「.....わたし.....できるかな.....」

守りたかった妹を亡くして、咲香は根本的に自信を失っている。彼も実際には似たり寄ったりの心境だ。きっとこの小さな旅は、彼らの細やかなあがきだった。

「心残りを無くして、この世界を出て行くんだろ？　しっかりやっとかないと、後で自分が苦勞するぜ」

自分がついてる。そうは言ってやれなかった。彼は双子の魂を引き受けてから、ある神意の渦に引きずり込まれていた。その一端がこれから顕れる。

水門の管理者。彼の家に代々伝わる、姓でも名でもないLの一文字がそれを意味していた。彼の真名は、ラスティ・L。あえて言えばロックキーパーらしい。

北の城についてすぐに、四天王との謁見に咲香は一人で向かった。彼についてきてほしがっていたのだが、彼らを出迎えた四天王の妹姫が優しく促したのだ。

クヤ・エステル。あどけない童顔ながら、控え目について九尾の妖狐にも劣らぬ美女は、四天王とは違う白い髪をふわふわと揺らす。咲香を広間に送った後、客間で優雅にお茶を差し出してきた。

「あら、まだ心配なのかな？　大丈夫よ、ヴァシュカは元々この子供だったんだから」
「.....だからだろ？　あんた達がそのつもりだから、咲香は必死に抵抗してる」

服装はかつての、病弱だった頃の双子に似ている。淡い色の肩掛けを両腕にかけ、動き難そうな長い着丈。

咲香を悪魔としての名で、ヴァシュカと呼ぶこと。四天王はまだ、咲香を跡取りにするのを諦めていないのだろう。その陰にはこの妹姫の存在があった。

「咲香はあんたのこと、素敵なお姫様って言ってた」

「あ、そうなの？　嬉しいな。ヴァシュカ、いいこ」

にこにこ言う顔には毒気がない。咲香がそう思ったこともわかる。しかし彼には、四天王と取引に来た時この相手に見せられた、ある夢の裏側の記憶が迫る。

客間の壁にかかる、太古の有名な少女の絵を背に、妹姫は彼に言った。鈍く赤い波を背中に揺らめかせて。

「人間の妹のために、あんなに傷付くなんて、可哀相。人間は弱い。弱ければ幸せになれないのは当たり前よ」

今日も結局、赤い波が妹姫の背後に浮かんでいる。運命の流れに、自分達は乗れなかった、と妹姫は彼に言った。この流れを変えよう、と彼に言い出していた。本当なら自分はもう死んでいるはずだった、と。人手が足りない北の城で、強い跡取りを造る生け贄として。

「ヴァシュカが来てくれたから、私はまだここにいるけど。どうせ、あと少しで終わるのが私達だもの」

「.....言っただろ。オレはそういうの、興味ないって」

「どうして？　貴男はきっと、橘桃花も助けられるよ」

くすくす、と赤い何かが、彼の懐に忍び寄ってくる。失った双子や初恋の相手。二人を赤い地獄の火の池に呑み込んでいく波。これが悪い夢でなく何なのだろう。

とっくに無自覚な妹姫が首を傾げた。自分が何者か気付いていない、暗黒の風に動かされる死者の笑顔で。

◆桜咲く日

十三歳で城に来た時から、水の力の使い方を教えてくれた北の四天王。人間の王国で療養していた咲香^{さくら}を呼び出したのは、やはり城に戻る気はないか、という話だった。思っていたより穏やかな顔で。

「母君からは、ヴァシュカが了承するなら良い、との回答を得ています。だから戻るかどうかは君次第です」

そのつもりはない、と言い切るには、咲香にも理由が足りなかった。妹が命を落とした事に対して、両親は何も言わないどころか行方すらわからなくなった。今の咲香に、信頼できる居場所は何処にもない。この城にいた時には少なくとも、悪い待遇は受けなかった。

それでも咲香には、行きたい場所があった。自分を受け入れてくれるかが不安であるが、今まできちんと遇してくれた四天王にも、挨拶をしようと思ったのだ。

「.....ごめんなさい。わたし、これからは人間界の、従姉達に住む所に行きたいんです」
見知らぬ国の初対面の相手よりは、四天王には普通に話せる。こんなに人見知りだっけ、と自分で思う。

「でも.....今日は、お礼もしようと思って来ました」

「お礼.....も？」

四天王は、咲香が「礼」を言うことも意外そうなら、他に目的がある話にも両目を丸くした。それでも先に四天王の言い分を告げる。

「君がここに戻るなら、北の聖地の鍵を継がせます。あそこにはミストの造った法具の数々と、古代の遺物が豊富に眠っている。君の妹を助ける術も、見つかる可能性があります」

北の島は、他の大陸とは違って唯一、古代の聖地がほぼ現存している特徴があった。最寄の北方四天王が管理するのは自然な流れだったようで、強大な結界を統括できる力を咲香にくれるということだろう。

何が眠っているかわからない聖地。死んだ妹はまだ、遺体を修復して残されている。ただ眠っているだけのような姿に、目を開けて、と何度願ったことだろうか。

「.....ありがとうございます。でも.....できません」

「.....」

「その代わりにわたしに、アークの秘宝をもう一度だけ視せて下さい。あと少しでアークは心が戻れるんです」

アークの秘宝。四天王が眉をはね上げた。四天王が探し求めた宝は、旧時代の伝承の魂を宿す遺産なのだ。

オセロット・アークの絵本。ミストが大好きだと、かつて教えてくれた昔話。化け物の国で生まれた人間の少女が、化け物のふりをして人間と戦う逸話だった。

北方四天王の人間嫌いは、実際に人間と関わる中で嫌気がさしたのもあるが、アークという純粋な少女を人間が誅した物語に衝撃を受けた過去があるらしい。

「.....あの秘宝に、本当に、アークが眠っていると？」

「はい。ミストがもう、アークの魂を引き上げてます。でもこのままだと形になりません。わたしがアークの、心を直接視つけにいきます」

以前までの咲香なら、そんな芸当はできなかった。しかし妹が死んだ時に、その原因となった宝を介して咲香は新たな力を受けた。それは「力」の姿が視える^{いろ}彩のない眼。

四天王は知るわけもないが、悪魔は契約で世を渡る化け物だ。咲香が成功すれば話は終わって、できなければまた交渉が振り出しに戻るだけだろう。

「.....わかりました。何か成算があるんですね、君は」

あまりの話の速さに、肩の力が抜けた。これまでは誰に何を尋ねても、こたえは返って来なかったのに。

どうして、悪魔の方が優しいのだろうか。四天王の穏やかな目付きに、涙が出そうになった一瞬だった。

秘宝の黒い珠玉を填める、古い鎧のある部屋の隅に、小さな灰色の猫のぬいぐるみが置かれていた。これがミストの造った大事な媒介で、黒い珠玉を大きな頭に内蔵すればアークの避難所にもなるものなのだ。

「.....それと、あれだね。ミストのお母様が造った、アークの鎧のための人形」

これまで鎧と珠玉のことしか、咲香は知らなかった。その人形や猫のぬいぐるみの存在を咲香が言い当てたので、造らせた四天王の態度は更に軟化を見せた。

それらが存在するとわかったのは、「力」の繋がりが視えたからだ。特にアークの鎧を着ける予定の人形は、病弱だったミスト本来の遺体から骨格を造られており、ミストが魂を汲んだアークなら宿れるだろう。あとはその依り代にまでアークの心を導いてやるだけなのだ。

「それでも.....わたし、生きられるかな.....^{とうか}桃花.....」

妹はこの秘宝の珠玉に触れて命を落とした。ただの人間の妹と化け物である咲香の条件は違うが、現在、咲香の精神状態はガタガタのまま。力の制御を最後までこなせる自信がなかった。「力」とは持ち主の心を映し、弱った心も表れてしまうものなのだから。

四天王とはしっかりお別れをする。ミストや妹が、本当に助けたかった相手だというアークを引き上げる。それさえ終われば咲香はもう地球に行く。

従姉一家の顔を思い浮かべて、呼吸を整えて両眼を閉じた。鎧の胸当てに填まる黒い珠玉に、気を込める右手で触れた途端、咲香のいる世界は暗転していた。

「.....ここは.....ちゃんと、中に来れた.....？」

妹が死んでしまう時に、咲香も僅かにだけ招かれた世の裏の黒闇。「力」の場であるはずの闇一面を、咲香は静かに視回す。どこまでも黒い場所が広がっている。

手元をふと見ると、灰色の猫のぬいぐるみを抱えていた。良かった、と一番大事な条件に安堵する。

「わたしを、アーク……あなたの^{ところ}処につれて行って」

ただ闇しか視えない中で、立っているから地面だと思ふ所にぬいぐるみを置いた。ひょこ、と短い手足で立ち上がったぬいぐるみが、闇の中へと走り出した。

そうしてどれだけ、ぬいぐるみの後を走っただろう。纏わりついてくる闇は、まるで水中にいるようだった。そして辿り着いた先で、咲香は予想外の相手に出会う。

「え——なんで……トウ、カ……!？」

そこには黒い髪の少女が立っていた。見た目は完全に妹と同じ、それでも咲香の知らない「力」。

「……待ってた、サクラ。ううん……『桃花』」

「——え？」

「私は、トウカ。あなたが言った通り、『桃花』の偽物。ごめんね。橘桃花は、あなたと別れた時に死んでるの」

確かに妹と同じ姿が、すぐこの目の前にあるのに。声も同じであるのに、言う通りに性格は違った。咲香が思い出す「桃花」は、人見知りで大人しかった。

「ここに来てくれたから。桃花はもう、あなたと一緒に」

ふわり、と妹の姿の少女が笑った。何かを言える隙もないまま、少女はぬいぐるみを抱き上げていた。

「アークを呼んであげて。あなたの声なら届く」

どうして。そう尋ねようとしたのはわかったようで、闇に消えていきながら、少女は最後に遺言を伝えた。

「悪魔となってもあなたも残す。それが桃花の望み」

意味は何も解らなかった。それでも何か、塞がることのない穴の空く胸に落ちた。

黒い闇の果てに光が視える。白い無色の光の誰か。

「私……強く、ならなきゃ」

もう一度だけ涙が流れた。儚い声も黒い闇に消えた。

S i d e - D -

☒罪跡

せっかく人間界の従姉を頼って一人立ちしていった咲香が、その従姉を連れてすぐ里帰りしてくるとは、彼の想定外が色々続いた。

咲香も人間界で咲姫の名をもらったといい、こちらにいる頃の怯えた様子は消えて、朗らかな青い眼を持つ娘になっていた。

「紹介するね。レナ……零^{れい}が私の従姉で、ゼロがその魂。ゼロが離れると零が暴れるから、気を付けてねって」

「何だよそれ。取り合わせの妙にもほどがあるだろ」

ゼロと呼ばれる、目付きの悪い白い兎のぬいぐるみ。それを肩に置く無表情の、蒼いウルフカットの美女。

二人と一匹は、零の弟の「力」を探すために帰って来たらしい。「力」が視えるという咲姫が従姉達と念願の再会を果たした時に、従兄の「力」がごっそり無くなっていると気が付いたのだ。

様々な事情で、従兄自身の人格も沈んでおり、まず「力」を探そう、ということで本来の出身地に戻ってきたわけだった。

「っつーても、何か手がかりはあるのか？ それ」

十四歳終盤の彼には二人は三歳以上年長なのだが、どうにも幼げに見えた。つい態度が不遜になる。

零は前魔王の娘だが悪魔ではなく、ゼロは零の力を制御する人格で悪魔だという。白い兎もどきは魔力で動き回り、零よりこの世界には詳しい、と話を始めた。

「探すべき所は二か所あるんだ。咲姫はオレと、竜の墓場を搜索するから、オマエは零を宥めすかしながら魔界に飛んでほしい」

「ちょっと待てよ。何で巻き込まれるんだよ、オレ」

さも、当たり前のように言うゼロ。ゼロが離れたら、面倒な相手になると咲姫が言ったばかりの零を、何故彼がエスコートする前提になっているのか。咲姫達が探す相手には彼は会ったこともなく、咲姫との関係もまだ知り合って一年にも満たない。

当の零も不満そうに、謎の話を口に出してきた。

「本当にコイツが、私達の縁者なのか？ 咲姫」

「何だよそれ。オレも何もきいてねーんだけど、え？」

「うん。トウカの大事なヒトだし、それにラスティ、零や龍斗^{りゅうと}のお父さんにもよく似てるの。理由は私にはわからないけど、ラスティには氷を扱える適性もある」

彼にも寝耳に水の話だった。霧の神泉を本尊とし、泉の精霊を司る一族の中、確かに彼は異端ではあった。それでも氷の力はこれまで扱ったことがない。

行方不明の従兄の悪魔、龍斗の「力」は氷らしい。龍斗自身が動けないので、同じく氷の適性があるゼロが咲姫側、零には彼がサポートについてほしいと言う。

その代わりに彼が抱える双子の魂を、咲姫は精霊と一つにすることができる、と言った。そうすれば彼の負担を少しでも和らげ、双子もいつか精霊としてならこの世に戻ることができるかもしれない、と。

「ほんとはこんな取引しなくても、私もそうしたいの。でも零を一人にするのは心配で、私にはラスティしか信じられる人がもういないから……」

まっすぐに彼の目を見て、潤んだ瞳で言う。これはさすがに断れなかった。双子の魂が彼の継いだ精霊と一つになるなら、確かに彼のメリットもある。取引を受けるとその場で決めた彼だった。

ゼロと咲姫がそうして、「竜の墓場」とやらに向かうために去ると、早速零が不満を前面に表していた。

「文句があるなら別についてこなくていい。私だって知らない奴と二人旅なんてガラじゃないんだ」

「でもあんた、氷、使えねーんだろ？ オレも本当に使えるかは知んねーけど、水属性なら何とかかな、って気はしてるし」

従兄の「力」を見つけたら、一時的にでも制御者が必要なのは解った。零は無理やりにもでも首根っこ掴んで帰る、と言うが、次の台詞で彼の気が大きく変わった。

「オマエみたいなガキが命かけるような事じゃない。桃花が死んだ理由も私は聞かされていない。今の咲姫を、全面的には信頼しない方がいい」

彼は目をぱちくりとさせる。どうやら咲姫がいる場では黙っていたが、零の一番の怒りはそこにあった。末の従妹とは零も人見知り同士で気が合わなかったというが、そうしたことをためらいなく正直に話す零に、不思議と悪い感情は持たなかった。

「なるほどな……。オレ、あんたと同感だから、もう少し色々教えてくれよ？」

咲姫は確かに、四天王の城に行く前後で随分変わり、強かさ^{したた}を身に着けている。零はあっさりと、あいつは半分悪魔になった、と彼の疑念を裏付けていた。

「今回の行き先も、炯^{けい}と取引して情報を得た結果だ。オマエも気をつけろよ、悪魔に利用されないように」

零は本心でそう言っている。要するに零より年下の彼を心配している。それがわかったので、誰が、と彼は、この旅に嫌でも同行することを決めたのだった。

彼と零が向かったのは、魔界の東方にある、小さな教会のようにひっそりとした城だった。前魔王の事変で深手を負って以後、隠居している悪魔がいるらしい。

「とりあえず氷竜はここで飼われてる。問題はソイツに、弟の心があるのかどうかなんだ」

行方不明の「力」。この城にいる悪魔の貴婦人が零の叔母から、「鍛えてやって」と飛竜型の氷魔を託されたという。零の末弟の焔だけがそのことを知っていて、隠されていた零は身内のほとんどに怒っている。

城を尋ねると、使用人も警備者も僅かしかおらず、城主の下に案内された。氷竜があるから魔界で権勢を保っていたが、もう城主は衰弱し切っているという。

私室に難無く彼らを通して、待っていたとばかりに、赤い寝着の貴婦人が力無く寝台にもたれて座っていた。

「いらっしやい。『彼』を迎えに来たのは、貴方達？」

もう長くない相手であるのは、真っ白な長い括り髪でわかった。容貌は若いままであるが、強い氷の力を扱う悪魔であっても、無縁で強大な氷竜の馭者となるのは相当負担が大きかったはずだ。

何故か零が神秘的な顔で黙っているのだから、彼が貴婦人と話し役になった。寝台の前の長椅子に二人でかける。

魔界の空は常に鉛色の夕べで、月明かりだけが強いからそうなるという。何処に行っても厳寒の荒野で、暖炉で燃やす魔物が手土産として一般的らしい。

今の貴婦人にもう氷竜を具現させる余力がないため、氷竜の姿は見せられないこと、連れて帰るなら二人のどちらかが一時的に使い手となる必要を説明された。これも結局咲杏と同じで、強い悪魔にさせるために、氷竜が留学に出された状況だった。

「龍斗君の心が氷竜にあるのか、それは私も、今まで確信できなかったわ。なければ氷竜が動くはずはないし、あれば黙って里子にもされないでしょう」

城主の全く言う通りだった。だからゼロと咲姫も、心を探しに竜の墓場とやらに向かったのだ。魂をゼロと分かれた零や、半分悪魔になったという咲姫、別人になっているらしい龍斗。普通の化け物には理解の難しい事が、この一家には沢山起こっている。

そして城主は、氷竜を渡す当然の条件を彼に伝えた。

「私を看取ってくれるかしら。最後の一瞬まで貴男を氷使いとして鍛えてあげる。やっと思いの荷が下りるわ」

そうするしかないだろうことは、彼にも判っていた。零はずっと黙っていた。まるで囚われの客人のように。

☒朔夜

初めは零那^{れな}という名前だった。本当はルナの意だが、新月だから月でも零だ、ということ^{こと}で零那になった。

春日零^{かすが}は、前魔王と竜王の間に生まれた魔の血統者で、母の雷の力と父の莫大な魔力を受け継いでいた。極少の雷が周囲に飛び交う危険な子供だったので、人と気楽に関わることができず生粋の人見知りだった。

十七歳になった時に、従妹の咲香^{さくら}が生まれた。独学で飛び級できるほど頭脳派だった零那は、就職したくなく大学院でぶらぶらしていた。日本と故郷の異世界は時間の流れが違うため、従妹はすぐに大きくなった。末の従妹の桃花^{とうか}も生まれ、咲香はいつも純粋に笑い、零を慕ってきた。臆病な桃花とは接点が少なかったが、歳の離れた従妹達を零は守ってやりたかった。

「.....は？ 咲香は悪魔、桃花は妖精に預けられた？」

首を傾げる両親からそんな話を聞いた時は、真相を確かめようと従妹一家の居住地に乗り込んでいった。三つ下の龍斗^{りゅうと}もその時についてきた。炯は末っ子だが、故郷で暮らした時があるので歳は零に近い。最も魔性が強いのが炯で、弟ながら何処か底知れなさがあった。

十八歳だった零は、そこでしばらく記憶が途切れる。気が付けば病院で目が覚め、両親が取り返した零の魂^{たま}というゼロがやがて来た。龍斗は鷹野花憐^{たかのかれん}という魔女の下で龍斗でなくなっており、誰も龍斗や零那に何が起こったのか知る者がいない。ただ、零那の魂がゼロと分かれてしまったので、もう今までと同じ零那ではないと、零とゼロと呼ばれるようになった。

その後、真相に近い断片を知ることができたのは、日本で想い人と同棲する炯が口を滑らせたからだだった。

「オレ達、桃花や色んな奴の、犠牲で生きてるのかも」

珍しく炯が滅入っていた。零は日本で、どうすれば就職せず生きられるか炯とよく相談していたが、ある晩炯は、いずれ魔界で悪魔をやる、と言い出したのだ。

「.....何、言い出すんだ。オマエ、働きたくないって、あれほど言ってたじゃないか」
「うんやあ。今でもそうだけど、そうもいかなさげで。龍斗と零はもう代償を払ったけど、オレはまだなんよ」

実力で言えば、前魔王の光を狐火の規模で制御可能な炯は、魔道の知識も含めて悪魔には向いている。

しかしそんな話ではなかった。「代償」という言葉が妙に零の胸に残り、魔界に行った時に浮かび上がった。

弟・龍斗の氷竜を預かっていた悪魔の貴婦人。正確には元婚約者を零の父に殺された未亡人で、零の父の師匠だったというから、悪魔とは苛酷な存在だと解る。

そこに零の父に似た少年を連れていく。何の冗談かと初めは思った。少年は氷竜を預かる時に貴婦人から「烙人^{ラクト}」の名を贈られ、また貴婦人の様々な遺産まで手にしている。よほどの信頼を得たのだろうが、零は貴婦人に会った時に、項垂れずにはいられなかった。

「魔王よりも、残党に注意しろ、とも言ってたな……」

現在、貴婦人の忠告に近い事が故郷で起こっていた。零も里帰りするか悩んだのだが、魔王の時にもう充分協力したとして、むしろ地球で頑張れと言われている。

就職したくないので、零は成人と同時に日本で起業した。それから現在二年が経っている。龍斗どころか富豪の養子になった咲姫まで鷹野花憐に先にとられ、安アパートで独り自堕落に暮らす毎日だ。

便利屋系の仕事を集めて、バイトに采配する個人事業なので、大体の事は家から出ずに作業できるが、依頼者のクレームが多いのには辟易していた。文句があるなら金払うな、二度と顔を見せるな、で対応していたら、どうしても上手く経営が回らず、赤字が続いている。

唯一の同居者、兎もどきのゼロが冷静に言う。

「依頼者の層を変えるしかないよな。だからあれだけ、事前面談制を取り入れると……」

「嫌だ。人間に会いたくない、顔を合わせたくない」

いつもこの繰り返し。そのために独立した零なので、机に突っ伏す姿に、ゼロも溜め息をつくしかない。

それでも零に従うバイトが沢山いるのは、弟の龍斗、ひいてはその兄貴分だった鷹野馨^{かおる}という男が、出不精の零那を連れ出しては子分達に関わらせていたおかげだった。そのため馨の腹違いの姉である花憐に、龍斗や咲姫を返せ、とは今も言えない。

「本当の馨が見つければなあ……アイツの舎弟、全部面倒みてやってるし、仕事丸ごとくれてやるのに……」

咲杏が悪魔に預けられて、真相を知ろうとした零那が昏睡している間に、馨は行方不明になっていた。零が目覚めた時には何と龍斗が、悪魔としての力で馨の身代わりを演じるようになっており、「別人になった」だけでなく氷竜も失くしていたことは咲姫の眼で後に判明する。

氷竜が戻った後も、龍斗の心は沈んだままだった。咲姫は半ば諦めてしまい、友達が関わる故郷の事変に協力するため、しばらく里帰りを検討しているらしい。

疲れた。机からベッドに移ると、ごろんと仰向けに寝転がった。ゼロがちょこんと枕に降り立ち、零の頭にもたれかかる。これだけで零は孤独を忘れられる。

魂を分かたれた代償なのか、零にはどうにも堪え性がない。知性は人一倍だが理性は乏しく、良識という分野はいつもゼロがカバーしている。

頭が良くて腕っぷしが強く、情はあるがものぐさで、そのくせズバズバ物を言う零を好いてくれるものなど、姐御として崇めてくれる舎弟達くらいだ。対等な関係でいられる友達のない零は、咲杏が悪魔になったことが本当に痛かった、と今更に思っていた。

「.....私専用の悪魔は、ゼロだけだからな」

悪魔は原則、対一の契約を主とする。零は咲杏を縛ることができない。龍斗も誓のままである現状で、咲杏は誰も本当に信用できないから咲姫になった。

零には、咲杏や龍斗の未来を照らせる光が持てない。まぶたの裏に暗闇が浸食してくる。自分一人の生活ですら、今月の家賃も危うい状態が続く。その意味でも鷹野花憐には勝てない。

もう、このまま眠っていたい。そう思いながら、昼間から寝付いた新月の一夜のことだった。その謎の自称天使が零の枕元に顕れたのは。

「——あ。レイ、起きた？ 見て見て、外、ほら！」

「.....あ.....？」

気が付けば零は机に戻って突っ伏していた。後ろでかかった透明な謎の声に、目の前のカーテンを開ける。

そこには月一つも見えない闇夜があった。そうした朔夜には有り得ないはずの、一筋の白い虹が。

「は——月虹だと？ 有り得ないだろ、こんな都会で」

「都会じゃないよ。オレやレイが、還ってくる闇だよ」

は？ と後ろを向くと、見たことのない月白の髪の、長い右ポニーテールの少女が立っていた。秋前の季節には似合わない、真っ黒なダッフルコートと黒い翼で。

「誰だ.....お前？」

「オレ？ オレは月光の天使。レイと違って、いない方が良かったから、ここずっとレイを見守ってるよ」

「は.....？」

何を、ときこうとした瞬間、闇からかすかに人の手が顕れた。少女の手を取り、闇の中に引き戻していく。

「還りたいなんて言わないで、レイ。カザリと一緒に、ずっと待ってる。レイが幸せになってくれることを」

そのまま少女は闇に還ってしまった。目が覚めると部屋は真っ暗だった。月明かり一つ入ることはなく。

S i d e - A -

十さぎなみ

氷の竜を御するために、悪魔の貴婦人に鍛えられた最初の半年は、まるで修羅の如きだった。

貴婦人曰く、彼の覚えが早過ぎるからだといひ、睡眠すらとれない日々は確実に衰弱した貴婦人にトドメをさした。

氷竜を具現できるようにまでなると、彼の体力的な負担は激増したが、習得すべき事柄は減った。全て教え切ることにはできない、と貴婦人が先に根を上げ、最後の数週間は介護に近い酒宴の日々だった。

「っても氷竜、ゼロに渡したけど.....反魔王派の助けにするとか、元魔王の子供の台詞かよ、それ」

十五の夏に氷竜を受け取り、その後に白い兎もどきに巻き上げられた。この一年の苦行は何だったんだと思いつつも、咲姫は約束通りに彼の双子の魂を精霊に遷してくれた。

彼は氷竜を御する竜牙烙人^{たつきらくと}からただの彼に戻り、兎もどきの頼みで反魔王活動にまで参加をすることになった。本体の零は起業の準備で忙しく、ゼロがこちらの世界に来るのを最低限にしたいので、魔王と戦う存在の「守護者」を探して、ゼロの属する反魔王派とつなげてほしい、ということだった。

反魔王派の本拠である国には、彼も戸籍をもらった恩義があった。

特にすべき事もないので協力依頼を受け入れ、十六歳になる間に守護者探しを始めた時のことだった。その怪しげな強い力を持つ少年吸血鬼と、少年を討伐せんとする雪白の天使に出会ったのは。

「ちょっと、ラクトさん！　そこをどいてください！　今日こそ私は、悪い魔族を征伐するんです！」

「悪いって、何でさ？　ちょっとラクトに一ちゃんの血をもらっただけじゃん」

だからよ！　と、神霊の白い翼を怒りに染める天使。

事の始まりは、吸血鬼の少年が地上で追手に襲われ死にかけていたところ、ヒトが襲われてる！　と天使が勘違いして少年を助けた。そこに彼が通りかかった。

その後に少年が吸血鬼という魔だと気付いた天使は、少年を光で灼こうとしたのだが、止めに入って少年に回復魔法までかけてやったのが彼だ。

「まーまー。血はオレが自分からやったし、汐ノ香^{しおのか}の光はそのままだとオレに直撃するし、落ち着け、な？」

雪の天使は、細かな雪の結晶に光を纏わせて攻撃を行う光使いだ。雪という氷、そして光。天使という、聖火を目に宿す天上の鳥に、彼は強く興味を持った。

どちらかという、天使の汐ノ香に興味を持っての関わりで、少年の救出はオマケ要素だった。ところが汐ノ香が天へ報告に帰った一夜に、少年は驚く事実を彼に打ち明ける。「これ……に一ちゃん、何でも屋なら直せる？」

彼が少年の怪我を治した後も、少年の体はなかなかきちんと動かなかった。それは少年が、自らを今まで生かしていた宝の制御装置を壊したからだという。

「ってオマエ……これ、宝珠じゃねーのか!？」

少年が、首の半分を覆う制御装置を無理やりはがした時に、装置の下に埋め込まれていた宝珠も上が欠けた。欠けて離れた方の結晶を彼は渡され、残りの角錐型の黒い石は、首の大きな傷痕の内にあると言う。確かに触れると強大な力の気配がわかった。

「とりあえず汐ノ香が戻る前に、これ、入れ替えるぞ。オマエに力を分ける媒介は欠けた方にして、オマエの中にある^{ざんげつ}残闕は違う形態で隠す。宝珠持ってるなんてバレたらオマエ、汐ノ香以外からも狙われるぞ」

「うん……もう疑われてて、それで追われてたから」

それでか、と項垂れた。確かにお尋ね者の守護者のおふれは出ていた。絵姿にまさか、とは思っていたが。

「一応きくけど。オマエは、守護者じゃないのか？」

「知らない。守護者だったら、誰ならわかるのかな」

何処か人形のような無情さで、吸血鬼の少年は諦めの声。少年を生かしているという宝珠。守護者でないなら少年は、それを真の守護者にいつか奪われる日が来る。少年が守護者であるなら、異端の魔の守護者がこの先どうなるか、二重の意味で頭が痛くなった。

彼も一族では異端者であり、精霊を受け継ぐ正当な後継者であるのに排除された。少年のぼろぼろな姿はあまりに、幼い頃の彼を彷彿とさせる。

「……仲間、いないのかよ、オマエ」

あの時彼を助けてくれたのは、彼の素性など気にせず受け入れてくれた仲間達だ。ぼかん、と少年は黒い目で彼を見つめ、いないよ、とだけ静かに答えた。

とりあえず手早く、少年の持つ宝珠の残闕を、黒い十字架型のペンダントトップに擬態した。欠片の方は首の傷に改めて埋め込み、精霊の回復魔法で蓋をする。

元々気配は解り難くなっていたので、これで何とか、大雑把なレーダーでの魔導探知は避けられるだろう。それ以上彼が少年にしてやれることは、少年のための武器を造り、戦い方を教えてやるくらいだった。

彼の修得が早い、と悪魔の貴婦人は驚いていたが、少年の成長は彼より早かった。三カ月で長柄の武器を扱う体の捌き方と旅の最低の心得、更には彼が渡した防具の扱い方まで少年は全てマスターしていた。

しかも少年は、二つもの精霊を翼の内に持っていた。三対と一枚で、全部で七枚ある翼の中で、強い霊力に満たされた二枚にそれぞれ精霊が宿っている。その内水の精霊は回復魔法まで可能とする共調ぶりで、精霊魔法の基礎まで習得した少年に彼は驚くばかりだった。

「あーあ……ラクトさんがあんなに鍛えちゃったから、これから私、まだまだ地上にいないとですね」

悪い吸血鬼を見張ります、と汐ノ香はずっと少年に付き纏っていた。結局本気で討伐するわけでもなく、無害と認めるのでもなく。

少年が、黒の宝珠に関わるお尋ね者であることを、後から汐ノ香も知ったらしかった。少年が眠っている時に彼におふれを見せて、どう思います、と問うた。彼は少年のためには白を切るしかなかった。

「さあなあ。オレこそ汐ノ香にききたいけど、アイツがもしも宝珠を持ってて、そして守護者でなかったら……汐ノ香はアイツを殺せるのか？」

少年を見張り、悪い魔であるなら討つ。そのために地上にいるはずの天使が、ぐっと言葉に詰まった。

本来、簡単な解答のはずだったろう。真の守護者に宝珠を渡すために、少年を討伐する。天使は守護者に肩入れしてはいけないらしいが、確証がない段階なら「悪魔だから排除した」も通じるだろうに。

お、と彼は思う。薄々感じてはいたが、この天使はあの孤高な少年に感情移入を始めている。それなら彼にはこの先、少年と天使にしてやれることが一つある。

そんな彼の思惑を知るわけもなく、ふっと、汐ノ香が顔を俯かせた。

そこで彼は否応なく気付く——その天使の背にも、かつて見た赤い波が揺らめくことに。

「汐ノ香……？」

「……どうして。あなたは誰なんですか、ラクトさん」

^{さざなみ}漣 汐ノ香。その名の意味を、彼は今も知らない。

「どうしてあなたは、烙人さんの言葉を言えるんです。ここでのあなたに、竜牙烙人をできる心はないのに」

それはこの、「有り得なかった夢」において、本当は存在しないはずの彼。

置き去りでなく、赤の闇も無く、蒼い目の彼が氷の竜を御せる心は何処にあるのか。

解らない、と言えなかった。それがこたえだった。

十 残闕

さざなみの天使に育てられた汐ノ香^{しおのか}は、上位者から「蒼い目の烙人^{ラクト}」を、「水門管理者」だと教えられた。

それが何であるのか、普段の汐ノ香は何も知らない。さざなみとは炎獄^{デヘナ}に属して、地上に運命の介入を行う天使の一門、その程度しか聞かされていない。

とにかく、烙人には注意するよう伝えられていた。その内実を、さざなみを知る海竜^{リタン}がこっそり明かす。

「一般的に炎獄の者は、様々な運命の在り方を視る力が強いと言われています。貴女が認識している貴女と、竜牙烙人が視ている貴女は同じではないかもしれない。もしも貴女も完全にさざなみとなれば、今までと違う周囲の姿が、貴女のことも脅かしにかかるでしょう」

この海竜は、汐ノ香が魔王と対峙する守護者の一人になった時に、力を貸してくれるようになった悪魔だ。かなり高位な召喚獣なのだが、宝珠の力を借りて契約している。歴史が古いので稀少な知識を教えてくれる。

水門管理者とは、炎獄の天使ではないが、さざなみの一端であるのは違いないのだという。秩序の担当、監視の担当など、様々なさざなみが存在するらしい。「でも、ラクトさん、いいヒトなんだけどな。それに私、漣^{さざなみ}汐ノ香の名前をもらったけど、結局黒の守護者にしてもらえたの？」

汐ノ香は元々、雪の潜在能力を持った人間で、天使にされたことで氷雪に光を載せて戦う力を得ていた。天使になって五年目の時、黒の宝珠を隠し持つ吸血鬼に地上で出会った。

本当は、討伐しなければ、と思って監視していた相手だったのに、少年があまりに優しく脆い吸血鬼なので、守りたくなってしまった。

黒の宝珠がなければ生きられない少年を、生かせる方法はたった一つ。少年を大切に思う者が黒の宝珠の守護者となり、力の鍵を少年に指定することだった。

「宝珠の力の解放も、『鍵』がどうの、っていうし……水門管理者も、水門という力の鍵、ってことかな？」

「おそらく近いと思いますよ。そして汐ノ香、貴女は今でこそ守護者ですが、今後さざなみにされる可能性も消えてはいません。油断はしないで下さい」

「うん。ラクトさんもそう言って、この人形の体を私にくれたんだもの。やっぱりいいヒトだと思うな？」

雪という氷の結晶と、光を扱える天上の聖火の器。それは烙人の師匠の遺骨で造られた人形だった。

さざなみとは、狂った運命を秩序へと戻すもの達。しかし運命を狂わせるのも因果のさざなみなのだと、汐ノ香は知らされていない。そしてまた、ある運命の誤差を人知れず補完してしまうのも水門次第であると。

現在、守護者になって六年、天使十一年目になった汐ノ香は、山奥の隠れ里に遺された災いを再封印する仕事を申し付けられていた。千年以上前の封印がもう限界に近いということで、まず以前の封印をしっかりと解いて、災いの依り代を弱らせる先鋒の役は「鍵」の少年が担ってくれた。

「大丈夫かな、翼^{よくる}籠……溶岩みたいな炎の瑞獣だってきいたから、私が相性悪いのは確かなんだけど……」

「山奥ですから、私の力も万全には使えませんね」

海竜はずっと、汐ノ香の天使の翼に宿って、念での会話を続けている。黒の宝珠は「鍵」たる少年翼籠に渡しており、持久力の問題さえなければ、翼籠の近接戦闘力は精霊魔法や烙人仕込みの武技を含め、汐ノ香とは段違いで高い。

汐ノ香はここぞという時に、海竜の渦で相手を殲滅させるか、光吹雪をぶつける役割を担ってきた。遠近相補のペアとして、見た目は幼くても破壊力が高い。

災いの依り代は、炎の獣。そんな古い情報まで聞いてきたのに、その獣に空夢を盗み見る禍^{わざわい}が混じっていることまでは、汐ノ香も知らなかった。ましてやその禍が、他者の空夢に侵入できることも。

両目を閉じて気配探知を研ぎ澄ませて、翼籠と炎の獣の戦いを探っていた汐ノ香の感覚を、突然真っ白な世界が占拠していた。

「——え？」

「……初めまして。漣、汐ノ香」

はっと立ち上がると、白い川と大地の岸辺に、黒い女性のようなシルエットが佇んでいた。そこでは海竜の声も届かなくなり、汐ノ香はわけがわからずに黙る。

シルエット、というしかない者。全像が黒くて顔が見えず、髪が長いのは一応わかる。剣を持ったような姿でもあり、知り合いでないことだけは明らかだった。

「不躰にごめん。でも私は、この運命だけは変えたい」

「……？」

「このままいけば、あなたは消える。さざなみの天使となって、あなたより高位な白夜^{はくや}の操り人形となる」

唐突に不穏なことを言われた。しかし「白夜」は、封印に來た災いの名だ。他に知る者などないはずの。

女性程の大きさのシルエットが、そこからゆっくり凝縮を始めた。まだ汐ノ香に話すことを続けながら。

「今は解らなくていい。でも私を、あなたが持ってて。それだけでもいつか、未来は動くかもしれない」

声が途切れると同時に、場にはまるで、狼のような黒い刻印が浮かんでいた。最後まで何も言えなかった汐ノ香は、恐る恐る手を近付けてみる。

「何だったんだろ、今の……ここ、どうやったら外に出られるのかな？」

見渡す限り、真っ白な地平。見分けの難しい白い川が幾つも流れる。

出口があるなら、目の刻印しかない。嫌でも受け取らないといけならしい。

「これ……何だか、リタンに近い感じもするけど……」

その刻印が冠する「力」の重さは、何となく判った。天使には色々制約があるので、得体の知れないものを迂闊に拾いたくないが、早く世に帰らなければ翼権が窮地にあるかもしれない。覚悟を決めて刻印を掴む。

次の瞬間、目前には虚無に戻っていく大きな炎の獣と、とどめを刺したらしい自分の右手が見えた。

白い世界にいたはずの間、現実の汐ノ香はきっちり翼権に合流していて、災いを自身に再封印したのだ。

「汐ノ香、大丈夫？ 『神』って、トドメを刺した奴に遷ってくるんでしょ。今のところ、変化はなさそう？」

「——うん。アシエル様の仰った通り、大丈夫そう」

このとどめの役目だけは、翼権に任せられなかった。人造の吸血鬼である翼権は、身体的にも精神的にも、様々な要素が欠けてしまっている。だからこそ、魔族であるのに優しい。「神」という災いに遷られなどしたら、おそらくあっさり自らを隠されてしまう。「天使は元々、最上の『神』——主^{しゅ}の御使いだから。こんな地上の闇に負けたりしないよ。心配しないで」

それは本当の話、強がりだった。天使になる前には人間だった汐ノ香は、海竜や宝珠がついていなければ天の翼だけでは心許ない。

人間とは、天の主^{しゅ}に理不尽を赦された生き物で、つまりは理で守り切れもしない弱者。力の拮抗だけで汐ノ香の心を守れるかどうか。

けれど翼権に、弱い心は見せたくなかった。守護者などという無茶な役目を引き受けた日から、汐ノ香は絶え間ない弱音を捨てた。深く考えることをやめた。

だから先刻手にした刻印が、何であったのかも今は気にしない。こたえが必要ならいつか顕れるものだ。夢の欠片でなく幻想の残闕が、ここにはあるのだから。

Many thanks for your visit. X@kazari_sou

錆びた鍵

著 者 pierrette**

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
